表紙解説

浄光寺跡の宝塔

この一帯を字寺畑と言う。現在は田と宅地に変っているが、中世の頃この寺は赤木谷七ケ寺の僧堂で、この広大な寺畑は寺領であったと推定される。

敷地内の古塔は、復元された三十余基で、残存の相輪・笠・宝珠などから推定すると百余基と想像される。

宝篋印塔二基に墨書の銘記がある。その一基がやっと「應永二十八年二月彼岸中」（一四二一）と読みとれる。室町前期の造立である。

宝塔は、高さ一、八二㍍で村内最高のものである。塔身四方に金剛界四仏の種子を浅い薬研彫りで配してある。しかし基礎の請花が亡失している。

浄光寺跡の古塔は、庵主酒井関道師により発掘され、地区民の協力で復元されたものである。

宝塔一基、宝篋印塔二基は村指定文化財である。

『直川の文化財』より

軸丸勇氏によれば、請花は国東塔型式の影響を受けるもので佐伯地方では珍らしいものという。

会員の著書紹介

豊後 毛利高政

御手洗一而著

立志編　戦国大名への道　二〇〇〇円
戦雲編　秀吉から家康へ　二〇〇〇円

新人物往来社発行

毛利高政伝の出版については、本誌前号（一三四号）の「毛利高政を脱稿して」と題する著者の文により、その刊行が待望されていたが、ついに発行された。

この文を一読すれば、著書の高政観がうかがわれ、いろいろと紹介することは不用と思われる。

『立志編』では高政の青年期を追っている。秀吉に仕え、人質から殿軍（しんがり）、勝ち戦では敵将の検使役、あげくの果ては寝返り組の娘まで押しつけられ、同僚の大名出世を横目で見ながら、どうやら日田藩主となるまでを描く。

『戦雲編』では、秀吉の死から関ケ原の役、西軍に味方しながら幸運に恵まれ、佐伯藩三百年の基礎をきずく波乱にとむ高政を描く。

書店で販売するが、史談会事務局・編集部・弥生町古藤田・宇目町軸丸・蒲江町富高丈夫・米水津村高宮昭夫の各氏で取次ぐ。是非御一読を。